



TITLE:

# 位相群の $\pi_n$ 空間へのUnitary表現の特性関数について (群の表現と調和解析)

AUTHOR(S):

酒井, 幸吉

---

CITATION:

酒井, 幸吉. 位相群の $\pi_n$ 空間へのUnitary表現の特性関数について (群の表現と調和解析). 数理解析研究所講究録 1979, 368: 224-240

ISSUE DATE:

1979-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/104629>

RIGHT:

## 位相群の $\Pi_n$ 空間への Unitary 表現の特性関数について

鹿児島大学教養部 酒井幸吉

任意の位相群  $G$  上に Quasi-positive definite 関数及び Quasi-negative definite 関数を導入し、これらの関数と  $G$  の  $\Pi_n$  空間への cyclic unitary 表現の特性関数との関係について述べる。

はじめに本文中で断りなく使用する記号も宣言しておく。  
 $G$  の単位元は  $e$ 、一般の元は  $g$  または  $h$  で表わす。 $G$  上の連続関数全体の集合を  $C(G)$  とする。 $\varphi(g) \in C(G)$  に対して、 $\varphi^*(g)$  は  $\varphi^*(g) = \overline{\varphi(g^{-1})}$  によって与えられる関数。線形空間の部分集合  $A$  が生成する線形部分空間を  $\text{ls}\{A\}$  と略記する。 $\mathbb{C}$ ,  $\mathbb{R}$  はそれぞれ複素数体、実数体を表わす。 $n$  はいつも任意に固定された non-negative integer とする。

### § 1 $G$ の $\Pi_n$ 空間への Cyclic unitary 表現

まず  $\Pi_n$  空間の定義からはじめる。いま非退化 Hermitian sesqui-linear form  $\langle, \rangle$  をもつ線形空間  $\mathcal{H}$  にて、これの極大負定値部

分空間 ( $\langle, \rangle$  に關する) の次元が  $n$  のとき,  $\{H, \langle, \rangle\}$  は  $\text{pre } \Pi_n$  空間であるという. この空間の極大負定値部分空間を  $\Pi$  (次元は  $n$ ), その直交補空間  $\Pi^\perp$  を  $\mathcal{P}$  とすると,  $\mathcal{P}$  は正定値部分空間となり  $H$  は  $\Pi$  と  $\mathcal{P}$  の直交直和に分解できる:

$$(1) \quad H = \Pi \oplus \mathcal{P} \quad (H \text{ の基本分解という}).$$

$H$  から  $\Pi, \mathcal{P}$  への射影作用素をそれぞれ  $N, P$  とし,  $J = P - N$  とおくと, 基本分解 (1) に対応して  $H$  に正定値内積  $(,)_J$  が

$$(2) \quad (x, y)_J = \langle Jx, y \rangle \quad (x, y \in H)$$

で定義できる.  $H$  には  $(,)_J$  より定まるノルムによって位相を与える. いま  $\{H, (,)_J\}$  が Hilbert 空間になるとき,  $\{H, \langle, \rangle\}$  は  $\Pi_n$  空間 (Pontrjagin space with negative rank  $n$ ) という. なお  $\Pi_0$  空間は Hilbert 空間と考えてよい. 任意の  $\text{pre } \Pi_n$  空間は完備化によって,  $\Pi_n$  空間の中に至る所稠密に埋め込むことができる. [2], [4] に  $\Pi_n$  空間についての詳しい解説がある.

さて  $(\text{pre}) \Pi_n$  空間  $H$  上の線形作用  $T$  が全単射で  $\langle Tx, Ty \rangle = \langle x, y \rangle$  ( $x, y \in H$ ) をみたすとき unitary 作用素であるという.  $G$  の  $(\text{pre}) \Pi_n$  空間  $H$  への unitary 表現  $\{U_g, H\}$  とは,  $G$  から  $H$  上の unitary 作用素群への準同型  $g \mapsto U_g$  で任意の  $x, y \in H$  によって定まる  $G$  上の関数  $\langle U_g x, y \rangle$  が連続であるものという. この表現  $\{U_g, H\}$  を単に一文字  $U$  で表わし, その表現空間  $H$  を  $H^U$  とかくことにする.  $G$  の  $\Pi_n$  空間への unitary 表現全体の集合

を  $\mathcal{U}_n(G)$  とする.  $U \in \mathcal{U}_n(G)$  とし,  $f \in \mathcal{H}^U$  が  $\{U_g f : g \in G\}^\perp = \{0\}$  をみたすとき,  $f$  は  $U$ -cyclic であるといい, この様な Vector の集合を  $cv(U)$  とかく.  $cv(U) \neq \phi$  (empty) のとき  $U$  は cyclic であるという.  $\mathcal{U}_n(G)$  の要素で cyclic なものの全体を  $\mathcal{CU}_n(G)$  で表わす. いま  $U \in \mathcal{CU}_n(G)$ ,  $f \in cv(U)$  に対して, 関数  $\varphi(g) = \langle U_g f, f \rangle \in \mathcal{C}(G)$  を  $U$  の  $f$  によって定まる特性関数と呼ぶ. Hilbert 空間  $\mathcal{H}$  の cyclic unitary 表現の場合と同様に次の定理が成立する (cf. [8]).

定理 1  $U^j \in \mathcal{CU}_n(G)$  の  $f_j \in cv(U^j)$  によって定まる特性関数を  $\varphi_j$  ( $j=1, 2$ ) とする.  $\varphi_1 = \varphi_2$  ならば,  $\mathcal{H}^{U^1}$  から  $\mathcal{H}^{U^2}$  上への isometric 同型  $T$  で  $U_g^2 T = T U_g^1$  かつ  $T f_1 = f_2$  なるものが存在する.  $\square$

$\Pi_n$  空間  $\mathcal{H}$  上の unitary 作用素  $T$  は, Hilbert 空間  $\{\mathcal{H}, (\cdot, \cdot)_T\}$  (cf. (2)) 上の有界作用素になり, そのノルムを  $\|T\|_T$  とかく. 一般に  $U \in \mathcal{U}_n(G)$  は一様有界 (i.e.  $\sup_{g \in G} \|U_g\|_T < \infty$ ) ではない. このことに関連して次の定理が成立する (cf. [8]).

定理 2  $U \in \mathcal{CU}_n(G)$  が一様有界であるための条件は  $U$  が有界な特性関数をもつことである.  $\square$

注意 1  $U \in \mathcal{U}_n(G)$  とし,  $\mathcal{H}^U$  は  $n$  次元  $U$ -不変負定値部分空間  $\mathcal{N}$  をもつとする. このとき  $\mathcal{P} = \mathcal{N}^\perp$  も  $U$ -不変であり,  $\mathcal{H}^U$  の基本分解  $\mathcal{H}^U = \mathcal{N} \oplus \mathcal{P}$  に対応して定まる正定値内積を  $(\cdot, \cdot)_T$  (cf. (2)) とすると,  $U$  は Hilbert 空間  $\{\mathcal{H}^U, (\cdot, \cdot)_T\}$  への unitary 表現とみなすことができる. 故にこの様な  $U$  は一様有界になる.

一方  $G$  が amenable なとき,  $U \in \mathcal{U}_n(G)$  が一様有界ならば,  $\mathcal{H}_U^\sigma$  は必ず  $n$  次  $U$ -不変負定値部分空間をもつ (cf. [7]).  $\square$

## § 2 Hermitian kernels of finite negative rank

$\Pi_n$  空間  $\pi$  の cyclic unitary 表現の特性関数を特徴づけるため, 標記にあるものを導入する. いま任意の Hermite 行列  $H$  に対して, その負の固有値の個数を  $r_-(H)$  で表わすことにする.

定義 1  $G \times G$  上の連続関数  $K(g, h)$  が次の性質 (a), (b) をもつとき Hermitian kernel of negative rank  $n$  であるという:

$$(a) \quad \overline{K(g, h)} = K(h, g)$$

(b) 任意の有限個の元  $g_i \in G$  ( $1 \leq i \leq m$ ) によって定まる

Hermite 行列  $K[g_1, g_2, \dots, g_m] := (K(g_i, g_j))$  に対して

$$r_-(K[g_1, g_2, \dots, g_m]) \leq n \quad \dots (*)$$

であり, しかも (\*) にて等号が成立する: ことがある.

この様な  $K(g, h)$  の集合を  $HK_n(G)$  とかく.  $\square$

いま  $K(g, h) \in HK_n(G)$  を任意に与える.  $h \in G$  を固定して与えらる関数  $g \mapsto K(h, g)$  と  $K_h$  とかき,  $C(G)$  の部分空間  $ls\{K_h: h \in G\}$  を  $\mathcal{H}_K$  とする.  $\mathcal{H}_K$  の元  $f_1 = \sum_{i=1}^p \lambda_i K_{g_i}$ ,  $f_2 = \sum_{j=1}^q \mu_j K_{h_j}$  ( $\lambda_i, \mu_j \in \mathbb{C}$ ) に対して,  $\langle f_1, f_2 \rangle_K = \sum_{i=1}^p \sum_{j=1}^q \lambda_i \bar{\mu}_j K(g_i, h_j)$  とおくと,  $\langle, \rangle_K$  は  $\mathcal{H}_K$  上の非退化 Hermitian sesqui-linear form になる. 特に次が成立する:

$$(3) \quad \langle K_g, K_h \rangle_K = K(g, h).$$

更に次の補題が成立する.

補題 1  $\{f_g(K), \langle, \rangle_K\}$  は  $p_k \pi_n$  空間である. この完備化を  $\{f_g(K), \langle, \rangle_K\}$  とすると, 写像  $G \ni g \mapsto K_g \in f_g(K)$  は弱連続 (i.e. 任意の  $x \in f_g(K)$  に対して  $G$  上の関数  $g \mapsto \langle K_g, x \rangle_K$  は連続) である.  $\square$

逆に次も成立する.

補題 2  $G$  から  $\pi_n$  空間  $f_g$  への写像  $g \mapsto \eta(g)$  に対して,  $G \times G$  上の関数  $K(g, h) := \langle \eta(g), \eta(h) \rangle$  は連続であるとする.  $f_g$  の部分空間  $\text{ls}\{\eta(g) : g \in G\}$  に含まれる極大負定値部分空間の次元を  $m$  ( $m \leq n$ ) とすると  $K(g, h) \in \text{HK}_m(G)$  である. 特に  $\{\eta(g) : g \in G\}^\perp = \{0\}$  ならば  $K(g, h) \in \text{HK}_n(G)$  になる.  $\square$

### § 3 Quasi-positive definite 関数

定義 2  $\varphi(g) \in \mathbb{C}(G)$  に対して,  $G \times G$  上の関数  $K(g, h) = \varphi(h^{-1}g)$  が  $\text{HK}_n(G)$  に属するとき,  $\varphi(g)$  は Quasi-positive definite function of rank  $n$  であるという. この様な関数全体の集合を  $P_n(G)$  で表わすことにする.  $\square$

$P_0(G)$  は  $G$  上の連続な positive definite 関数の集合に外ならない. いま  $U \in \mathbb{C}U_n(G)$  の  $f \in \mathbb{C}U(U)$  によって定まる特性関数  $\varphi_f(g)$  とすると, 補題 2 より  $K(g, h) = \varphi_f(h^{-1}g) = \langle U_g f, U_h f \rangle \in \text{HK}_n(G)$ . すなわち,  $\varphi_f(g) \in P_n(G)$  である.

一方  $\varphi(g) \in P_n(G)$  に任意に与え、 $K(g, h) := \varphi(h^{-1}g) \in HK_n(G)$  とする。  
 このとき  $K_g(g^{-1}h) = K_{gg_0}(h)$ ,  $K(gg_1, gg_2) = K(g_1, g_2)$  なる関係が  
 成立するから、pre  $\Pi_n$  空間  $\mathcal{H}_g[K]$  への  $G$  の unitary 表現  $g \rightarrow U_g' \in$   
 $U_g' f(h) = f(g^{-1}h)$  ( $f \in \mathcal{H}_g[K]$ ) によって定義できる。この表  
 現  $U'$  の  $\Pi_n$  空間  $\mathcal{H}_g(K)$  (cf. 補題 1) 上への拡張を  $U$  とすると、 $U$   
 は cyclic になる。実際  $f_0 = K_e$  とすると、 $U_g f_0 = K_g$  だから  $\mathcal{H}_g(K)$   
 の作りより、 $f_0$  は  $U$ -cyclic である。しかも  $U$  の  $f_0$  によっ  
 て定まる特性関数は  $\varphi(g)$  になる:

$$\langle U_g f_0, f_0 \rangle_K = \langle K_g, K_e \rangle_K \stackrel{(3)}{=} K(g, e) = \varphi(g).$$

すなわち  $\varphi(g)$  を特性関数にもつ  $U \in \mathcal{U}_n(G)$  が存在する。更に  
 定理 1 より、この様な  $U$  は unitary 同値なものを除き一意に  
 きまる。これを  $U(\varphi)$  とかくことにする。以上まとめて

定理 3  $\varphi(g) \in P_n(G) \Leftrightarrow U(\varphi) \in \mathcal{U}_n(G)$  及び  $f \in \mathcal{U}(U(\varphi))$  が存在して  
 $\varphi(g)$  は  $\varphi(g) = \langle U(\varphi)_g f, f \rangle$  と表わされる。

しかも任意の  $\varphi(g) \in P_n(G)$  に対して、上の  $U(\varphi)$  は unitary 同値  
 なものを除き一意にきまる。  $\square$

注意 2 (A)  $\varphi_i(g) \in P_{n_i}(G)$  ( $i=1, 2$ ) とすると、適当な整数  $m$   
 ( $0 \leq m \leq n_1 + n_2$ ) が存在して、和  $\varphi(g) = \varphi_1(g) + \varphi_2(g)$  は  $P_m(G)$  に属す。

(B) 一般に  $U \in \mathcal{U}_n(G)$ ,  $f \in \mathcal{H}^U$  に対して、 $\varphi(g) = \langle U_g f, f \rangle \in P_m(G)$ 。  
 ここで  $m (\leq n)$  は  $\mathcal{H}^U$  の部分空間  $\mathcal{L} \{ U_g f : g \in G \}$  に含まれる  
 極大負定値部分空間の次元に等しい。  $\square$

任意の  $U \in \mathcal{W}_n(G)$  に対して  $\mathcal{E}(U) := \{x \in \mathcal{E}_n^U : U_g x = x \ (\forall g \in G)\}$  とおくと,  $U$  が cyclic ならば  $\mathcal{E}(U)$  は高々 1 次元である. このことに注意して  $\mathcal{CW}_{n+1}(G)$  の次の様ないくつかの部分集合を定義する:

$$\mathcal{CW}_{n+1}(G, \check{\mathcal{E}}) = \{U \in \mathcal{CW}_{n+1}(G) : \mathcal{E}(U) = \{0\}\},$$

$$\mathcal{CW}_{n+1}(G, \mathcal{E}) = \mathcal{CW}_{n+1}(G) \setminus \mathcal{CW}_{n+1}(G, \check{\mathcal{E}}).$$

$\mathcal{CW}_{n+1}(G, \mathcal{E})$  に属する  $U$  で,  $\mathcal{E}(U)$  が non-positive, negative definite, neutral になるものの全体をそれぞれ  $\mathcal{CW}_{n+1}^N(G, \mathcal{E})$ ,  $\mathcal{CW}_{n+1}^{(-)}(G, \mathcal{E})$ ,  $\mathcal{CW}_{n+1}^{(0)}(G, \mathcal{E})$  で表わす. 更に  $\mathcal{CW}_{n+1}^{(0)}(G, \mathcal{E})$  を次の二つに分ける:

$$\mathcal{CW}_{n+1}^{(+0)}(G, \mathcal{E}) = \{U \in \mathcal{CW}_{n+1}^{(0)}(G, \mathcal{E}) : \mathcal{E}_n^U \text{ は } \mathcal{E}(U) \text{ を含む } U\text{-不変な } 2\text{-次元部分空間を含む}\},$$

$$\mathcal{CW}_{n+1}^{(Z)}(G, \mathcal{E}) = \mathcal{CW}_{n+1}^{(0)}(G, \mathcal{E}) \setminus \mathcal{CW}_{n+1}^{(+0)}(G, \mathcal{E}).$$

$$\begin{aligned} \text{従って } \mathcal{CW}_{n+1}^N(G, \mathcal{E}) &= \mathcal{CW}_{n+1}^{(-)}(G, \mathcal{E}) \cup \mathcal{CW}_{n+1}^{(0)}(G, \mathcal{E}) \quad (\text{disjoint union}) \\ &= \mathcal{CW}_{n+1}^{(-)}(G, \mathcal{E}) \cup \mathcal{CW}_{n+1}^{(+0)}(G, \mathcal{E}) \cup \mathcal{CW}_{n+1}^{(Z)}(G, \mathcal{E}) \quad (\text{disjoint union}). \end{aligned}$$

上に定義した  $\mathcal{CW}_{n+1}(G)$  の各部分集合に対応して,  $P_{n+1}(G)$  の部分集合  $P_{n+1}(G, \check{\mathcal{E}})$ ,  $P_{n+1}(G, \mathcal{E})$ ,  $P_{n+1}^N(G, \mathcal{E})$ ,  $P_{n+1}^{(-)}(G, \mathcal{E})$ ,  $P_{n+1}^{(0)}(G, \mathcal{E})$ ,  $P_{n+1}^{(+0)}(G, \mathcal{E})$ ,  $P_{n+1}^{(Z)}(G, \mathcal{E})$  は,  $\varphi(g) \in P_{n+1}(G)$  で  $U(\varphi)$  がそれぞれ  $\mathcal{CW}_{n+1}(G, \check{\mathcal{E}})$ ,  $\mathcal{CW}_{n+1}(G, \mathcal{E})$ ,  $\mathcal{CW}_{n+1}^N(G, \mathcal{E})$ ,  $\mathcal{CW}_{n+1}^{(-)}(G, \mathcal{E})$ ,  $\mathcal{CW}_{n+1}^{(0)}(G, \mathcal{E})$ ,  $\mathcal{CW}_{n+1}^{(+0)}(G, \mathcal{E})$ ,  $\mathcal{CW}_{n+1}^{(Z)}(G, \mathcal{E})$  に属するものの全体とする.

また  $G$  上の non-zero real character (i.e.  $G$  上の実数値関数  $r(g) \in \mathbb{C}(G)$ ,  $r(g) \neq 0$  で  $r(gh) = r(g) + r(h)$  を満たすもの)の集合を  $A(G)$  とする. 以上の記号のもとに次の二つの補題が成立する.



補題 3  $U \in \mathcal{CW}_{n+1}^{(-)}(G, \varepsilon) \Leftrightarrow U = V (+) \varepsilon^-$  なる形に分解できる.

ただし  $V \in \mathcal{CW}_n(G, \check{\varepsilon})$ ,  $\varepsilon^- \in \mathcal{CW}_1(G, \varepsilon)$  は 1 次元  $\pi_1$  空間への trivial 表現である. この様な  $U$  に対して

$$cv(U) = \{x + \omega : x \in \mathfrak{g}^{\varepsilon^-}, x \neq 0, \omega \in cv(V)\}. \quad \square$$

補題 4  $U \in \mathcal{CW}_{n+1}^{(+0)}(G, \varepsilon) \Leftrightarrow U = V (+) W$  なる形に分解できる.

ただし  $V \in \mathcal{CW}_n(G, \check{\varepsilon})$ ,  $W$  は  $r(g) \in A(G)$  を用いて次の様に定義される:  
 $W_g \xi = \xi$ ,  $W_g \eta = \sqrt{-1} r(g) \xi + \eta$ ,  $\xi, \eta \in \mathfrak{g}^W$   
 ( $= 2$  次元  $\pi_1$  空間) のベースで  $\langle \xi, \xi \rangle = \langle \eta, \eta \rangle = 0$ ,  $\langle \xi, \eta \rangle = 1$  をみたすものである. この様な  $U$  に対して

$$cv(U) = \{\alpha \xi + \beta \eta + \omega : \alpha, \beta \in \mathbb{C}, \alpha \beta \neq 0, \omega \in cv(V)\} \quad \square$$

上の二つの補題と定理 3 より次の結果を得る.

定理 4  $P_{n+1}^{(-)}(G, \varepsilon) = \{p(g) - c : p(g) \in P_n(G, \check{\varepsilon}), c \in \mathbb{R}, c > 0\}$

$$P_{n+1}^{(+0)}(G, \varepsilon) = \{\sqrt{-1} r(g) + p(g) + c : r(g) \in A(G), p(g) \in P_n(G, \check{\varepsilon}), c \in \mathbb{R}\} \quad \square$$

注意 3  $P_i(g) \in P_n(G, \check{\varepsilon})$ ,  $r_i(g) \in A(G)$ ,  $c_i \in \mathbb{R}$  ( $i=1, 2$ ) とする.

もし  $P_1(g) + c_1 = P_2(g) + c_2$  ならば,  $P_1(g) = P_2(g)$ ,  $c_1 = c_2$  である.

実際  $c = c_1 - c_2 > 0$  と仮定すると, 定理 4 より  $P_1(g) = P_2(g) - c$  は  $P_{n+1}^{(-)}(G, \varepsilon)$  に属する. これは矛盾である ( $\because P_n(G) \cap P_{n+1}(G) = \emptyset$ ).

従って  $P_1(g) = P_2(g)$ ,  $c_1 = c_2$  である. 同様に,  $\sqrt{-1} r_1(g) + P_1(g) + c_1$

$= \sqrt{-1} r_2(g) + P_2(g) + c_2$  ならば,  $r_1(g) = r_2(g)$ ,  $P_1(g) = P_2(g)$ ,

$c_1 = c_2$  であることが結論できる. □

## § 4 Quasi-negative definite 関数

$P_{n+1}^N(G, \varepsilon)$  に属する関数を統一的に特徴づけるために標記のものを導入する.  $\varphi(g) \in C(G)$  に対して  $G \times G$  上の関数  $K^\varphi(g, h)$  を

$$(4) \quad K^\varphi(g, h) = \varphi(h^{-1}g) - \varphi(g) - \overline{\varphi(h)}$$

によって定めることにする.

定義 3  $\varphi(g) \in C(G)$  が  $\varphi(e) = 0$  かつ  $K^\varphi(g, h) \in HK_n(G)$  のとき Quasi-negative definite function of rank  $n$  であるという. この様な関数の集合を  $N_n(G)$  とかく.  $\square$

$\varphi(g) \in N_n(G)$  ならば  $\varphi^*(g) = \varphi(g)$  である. なお  $N_0(G)$  は negative definite (or conditional positive definite) 関数と呼ばれるものなので  $e$  で zero となるものの集合である (cf. [1], [3]).

注意 4  $\varphi(g) = \sqrt{-1}r(g)$  ( $r(g) \in A(G)$ ) とおくと  $K^\varphi = 0$  となるから,  $\varphi(g) \in N_0(G)$  である. 逆に  $\varphi(g) \in N_0(G)$ ,  $\varphi(g) \neq 0$ ,  $K^\varphi = 0$  ならば,  $\varphi(g)$  は  $\sqrt{-1}r(g)$  ( $r(g) \in A(G)$ ) なる形である.  $\square$

任意の  $V \in \mathcal{U}_n(G)$  に対して, この弱連続 1-cocycle (i.e.  $G$  から  $\mathfrak{g}^V$  への弱連続写像  $g \mapsto \eta(g)$  で  $\eta(hg) = \overline{V}_h \eta(g) + \eta(h)$  をみたすもの) の全体を  $\Sigma'(G, V)$  とし,  $B'(G, V) = \{\partial \nu(g) = \overline{V}_g \nu - \nu : \nu \in \mathfrak{g}^V\} (\subseteq \Sigma'(G, V))$  とおく. 更に

$$\Sigma'_t(G, V) := \{\eta(g) \in \Sigma'(G, V) : \{\eta(g) : g \in G\}^\perp = \{0\}\},$$

$$B'_t(G, V) := B'(G, V) \cap \Sigma'_t(G, V).$$

$N_n(G)$  と  $\mathcal{U}_n(G)$  は次の定理によって関連づけることができる.

定理 5  $\varphi(g) \in C(G)$  に対して  $K^p \neq 0$  とする. このとき

$\varphi(g) \in N_n(G)$  であるための条件は  $V \in \mathcal{U}_n(G)$  及  $\eta(g) \in \Sigma'_t(G, V)$  が存在して次の関係 (5) が成立することである:

$$(5) \quad \langle \eta(g), \eta(h) \rangle = \varphi(h^{-1}g) - \varphi(g) - \overline{\varphi(h)} (= K^p(g, h)). \quad \square$$

十分性は  $\eta(e) = 0$  なることと補題 2 より明らか. 逆に  $\varphi(g) \in N_n(G)$ ,  $K^p \neq 0$  とすると, 次の関係が成立する (cf. §2):

$$(6) \quad K_{g_0}^p(g^{-1}h) - K_{g_0}^p(g^{-1}) = K_{gg_0}^p(h) - K_{g_0}^p(h)$$

この関係より  $\text{pre } \Pi_n$  空間  $\mathcal{F}_g[K^p]$  上の  $G$  の unitary 表現  $g \mapsto V_g'$  を

$$V_g' f(h) = f(g^{-1}h) - f(g^{-1}) \quad (f \in \mathcal{F}_g[K^p])$$

と定義できる. この表現  $V'$  の  $\Pi_n$  空間  $\mathcal{F}_g(K^p)$  への拡張  $\varepsilon V'$  とする.

更に  $G \ni g \mapsto \eta(g) = K_g^p \in \mathcal{F}_g(K^p)$  によって  $\eta(g)$  を定めると, (6) 及  $\square$  補題 1 より  $\eta(g) \in \Sigma'_t(G, V)$  なることが判る. しかも (3), (4) から (5) が従う. よって定理 5 の必要性が判る.

注意 5 (A)  $\varphi(g) \in N_n(G)$  に対して, (5) をみたす  $V \in \mathcal{U}_n(G)$  及  $\eta(g) \in \Sigma'_t(G, V)$  は unitary 同値なものを除き一意にきずる (cf. [9]). この  $V, \eta(g) \in V', \eta_p(g)$  で表わすことにする.

(B)  $V \in \mathcal{U}_n(G)$  とする.  $\eta(g) \in \Sigma'_t(G, V)$  を任意に与えたとき, (5) をみたす  $\varphi(g) \in C(G)$  が存在するかどうかは明らかではない. もし実数値連続関数  $\psi(g)$  で

$$\text{Im} \langle \eta(h), V_h \eta(g) \rangle = \psi(hg) - \psi(g) - \psi(h)$$

をみたすものがあれば,  $\varphi(g) = \sqrt{-1} \psi(g) - \frac{1}{2} \text{Re} \langle \eta(g), \eta(g) \rangle$

は (5) を満たす (cf. [9]). ▣

$\varphi(g) \in N_n(G)$  に対応する  $\eta_g(g) \in Z'_t(G, V^p)$  に着目して,  $N_n(G)$  を次の二つに分ける:

$$N_n^{(B)}(G) = \{ \varphi(g) \in N_n(G) : \eta_g(g) \in B'_t(G, V^p) \},$$

$$N_n^{(Z)}(G) = N_n(G) \setminus N_n^{(B)}(G),$$

ただし  $n=0$  の場合  $\sqrt{-1}A(G) \subset N_0^{(B)}(G)$  と考える (cf. 注意 4).

$N_n^{(B)}(G)$  に属する関数の形を知るため, 次の二つの補題あげる.

補題 5  $V \in \mathcal{U}_n(G)$ ,  $\partial V(g) \in B'(G, V)$  とし,  $p(g) = \langle V_g v, v \rangle$  とおく.

このとき  $\eta(g) = \partial V(g)$  に対して (5) を満たす  $\varphi(g)$  は存在し, 次の形で与えられる:

$$\varphi(g) = \sqrt{-1}r(g) + p(g) - p(e),$$

ただし  $r(g) = 0$  又は  $r(g) \in A(G)$  である. ▣

補題 6  $V \in \mathcal{U}_n(G)$ ,  $\eta(g) = \partial V(g) \in B'(G, V)$  とすると,

$$\eta(g) \in B'_t(G, V) \Leftrightarrow V \in \mathcal{U}_n(G, \check{E}) \text{ かつ } v \in v(V). \quad \text{▣}$$

これらの補題及び注意 3 より次の結果を得る.

定理 6  $\varphi(g) \in N_n^{(B)}(G) \Leftrightarrow \varphi(g)$  は次の (7) 又は (8) で表わされる:

$$(7) \quad \varphi(g) = p(g) - p(e), \quad (p(g) \in P_n(G, \check{E})),$$

$$(8) \quad \varphi(g) = \sqrt{-1}r(g) + p(g) - p(e), \quad (r(g) \in A(G), p(g) \in P_n(G, \check{E})).$$

(7), (8) の右辺にある  $p(g)$ ,  $r(g)$  は  $\varphi(g)$  により一意的に定まる. ▣

次の § での記述を簡単にするため, (7), (8) で与えられる関数  $\varphi(g)$  の集合をそれぞれ  $N_n^{(-)}(G)$ ,  $N_n^{(+)}(G)$  とかく. 従って

$$N_n(G) = N_n^{(-)}(G) \cup N_n^{(+0)}(G) \cup N_n^{(Z)}(G) \quad (\text{disjoint union}).$$

注意 6  $\eta=0$  の場合  $N_0^{(-)}(G), N_0^{(+0)}(G), N_0^{(Z)}(G)$  は次の様に特徴づけられることもできる (cf. [9]). いま  $\varphi(g) \in N_0(G)$  とすると,

$$\varphi(g) \in N_0^{(-)}(G) \Leftrightarrow \varphi(g) \text{ は有界},$$

$$\varphi(g) \in N_0^{(+0)}(G) \Leftrightarrow \operatorname{Re} \varphi(g) \text{ は有界}, \operatorname{Im} \varphi(g) \text{ は非有界},$$

$$\varphi(g) \in N_0^{(Z)}(G) \Leftrightarrow \operatorname{Re} \varphi(g) \text{ は非有界}. \quad \square$$

### § 5 $N_n(G), \mathbb{C}W_{n+1}^N(G, \varepsilon)$ 及び $P_{n+1}^N(G, \varepsilon)$ の関係

いま  $U \in \mathbb{C}W_{n+1}^{(0)}(G, \varepsilon)$  (cf. § 3),  $\eta \in \mathcal{C}U(U)$  とする. このとき neutral vector  $\xi \in \mathcal{E}(U)$   $\varepsilon \langle \xi, \eta \rangle = 1$  を満たすように選ぶ.

$f_\eta(\xi, \eta; c) := \lambda s\{\xi, \eta\}$  (ただし  $c = \langle \eta, \eta \rangle$ ) とおくと, これは  $\Pi_1$  部分空間であり,  $f_\eta^U \in f_\eta^U = f_\eta(\xi, \eta; c) (+) f_\eta$ . ( $f_\eta = \Pi_n$  部分空間) と分解しておく. この分解に対応して,  $U$  は次の様に表わすことができる:

$$U_\eta \xi = \xi$$

$$U_\eta \omega = \langle U_\eta \omega, \eta \rangle \xi + V_\eta \omega = \langle \omega, \eta(g^{-1}) \rangle \xi + V_\eta \omega, \quad (\omega \in f_\eta)$$

$$U_\eta \eta = \varphi(g)\xi + \eta + \eta(g).$$

ここで  $\{V_\eta, f_\eta\} \in \mathbb{C}W_n(G)$ ,  $\varphi(g) \in \mathbb{C}(G)$ ,  $\eta(g) \in \mathbb{Z}'_t(G, V)$  である. しかも  $\varphi^*(g) = \varphi(g)$ ,  $\varphi(e) = 0$  かつ次の関係が成立する:

$$\varphi(hg) = \varphi(h) + \varphi(g) + \langle \eta(g), \eta(h^{-1}) \rangle.$$

従って, 定理 5 より  $\varphi(g) \in N_n(G)$  となる. 更に  $U$  の  $\eta$  によ

て定まる特性関数は  $\varphi(g) + C$  である.

— 才  $\varphi(g) \in N_n(G)$  及  $w, C \in \mathbb{R}$  も任意に与える.  $V = V^p \in \mathcal{U}_n(G)$ ,  $\eta(g) = \eta_p(g) \in Z_t^1(G, V^p)$  (cf. 注意 5 (A)) とおき,  $f_g(\xi, \eta; C)$  は 2 次元  $\Pi$  空間で  $\langle \xi, \xi \rangle = 0$ ,  $\langle \xi, \eta \rangle = 1$ ,  $\langle \eta, \eta \rangle = C$  を満たすベース  $\{\xi, \eta\}$  をもつものとする. 更に  $\Pi_{n+1}$  空間  $f_g \in f_g = f_g(\xi, \eta; C)(\dagger) f_g^V$  と定める. このとき,  $G$  の unitary 表現  $U^{(p, C)} = \{U_g, f_g\} \in$

$$U_g \xi = \xi, \quad U_g w = \langle w, \eta(g^{-1}) \rangle \xi + V_g w \quad (w \in f_g^V),$$

$$U_g \eta = \varphi(g) \xi + \eta + \eta(g).$$

と定義できる. 任意の  $C \in \mathbb{R}$ ,  $\varphi(g) \in N_n^{(+0)}(G) \cup N_n^{(Z)}(G)$  に対して,  $U^{(p, C)}$  は cyclic であり,  $\eta \in \text{cv}(U^{(p, C)})$  となる. すなわち, この場合  $U^{(p, C)} \in \mathcal{CU}_{n+1}^{(+0)}(G, \varepsilon)$  である. しかも  $U^{(p, C)}$  の  $\eta$  によって定まる特性関数は  $\varphi(g) + C$  となる.

より詳しく次の定理が成立する (cf. [9. §§6-7]).

定理 7  $\mathcal{CU}_{n+1}^{(+0)}(G, \varepsilon) = \{U^{(p, C)} : \varphi(g) \in N_n^{(+0)}(G), C \in \mathbb{R}\}.$

$$\mathcal{CU}_{n+1}^{(Z)}(G, \varepsilon) = \{U^{(p, C)} : \varphi(g) \in N_n^{(Z)}(G), C \in \mathbb{R}\}. \quad \square$$

定理 8  $P_{n+1}^{(+0)}(G, \varepsilon) = \{\varphi(g) + C : \varphi(g) \in N_n^{(+0)}(G), C \in \mathbb{R}\},$

$$P_{n+1}^{(Z)}(G, \varepsilon) = \{\varphi(g) + C : \varphi(g) \in N_n^{(Z)}(G), C \in \mathbb{R}\}.$$

特に  $N_n^{(+0)}(G) \subset P_{n+1}^{(+0)}(G, \varepsilon)$ ,  $N_n^{(Z)}(G) \subset P_{n+1}^{(Z)}(G, \varepsilon).$  □

注意 7  $\varphi(g) \in N_n^{(+0)}(G)$  の場合, 任意の  $C \in \mathbb{R}$  に対して  $U^{(p, C)}$  は

$$U^{(p, C)} = V(\dagger) \varepsilon^+ \quad \text{と分解できる. ただし } V \in \mathcal{CU}_{n+1}^{(+0)}(G, \varepsilon), \varepsilon^+$$

は 1 次元  $\Pi_0$  空間  $\wedge$  の  $G$  の trivial 表現である. 従って  $\varepsilon(U^{(p, C)})$

は2次元となり,  $U^{(\varphi, c)}$  は cyclic ではない.  $\square$

上の注意にもかかわらず,  $P_{n+1}^{(-)}(G, \varepsilon)$  に属する関数は  $N_n^{(-)}(G)$  に属する関数を用いて表わすことができる. いま  $\varphi(g) \in N_n^{(-)}(G)$  とすると, 定理6より  $\varphi(g) = p(g) - p(e)$ , ( $p(g) \in P_n(G, \mathbb{C})$ ) なる形で表示され,  $p(g)$  しかかゝって  $p(e)$  は  $\varphi(g)$  に対して一意に定まる. このことより  $\varphi(g) \in N_n^{(-)}(G)$  に対して,  $\mu(\varphi) \in \mathbb{R} \cup \{+\infty\}$  と

$$(9) \quad \mu(\varphi) = \begin{cases} p(e) & (\varphi(g) = p(g) - p(e), p(g) \in P_n(G, \mathbb{C})) \\ +\infty & (\varphi(g) \in N_n^{(-)}(G) \setminus N_n^{(-)}(G)) \end{cases}$$

と定める. このとき定理4と(7)を比較すると次の定理を得る.

定理9  $P_{n+1}^{(-)}(G, \varepsilon) = \{ \varphi(g) + c : \varphi(g) \in N_n^{(-)}(G), c \in \mathbb{R}, c < \mu(\varphi) \}.$   $\square$

注意8 (A)  $\varphi(g) \in N_n^{(-)}(G)$  とすると, 次の成立する.

$$\mu(\varphi) > 0 \Rightarrow \varphi(g) \in P_{n+1}^{(-)}(G, \varepsilon)$$

$$\mu(\varphi) = 0 \Rightarrow \varphi(g) \in P_n(G, \mathbb{C})$$

$$\mu(\varphi) < 0 \Rightarrow \varphi(g) \in P_n(G, \varepsilon).$$

(B) 定理8-9と(9)より,  $N_n(G)$  と  $P_{n+1}^N(G, \varepsilon)$  は次で結ばれる.

$$(10) \quad P_{n+1}^N(G, \varepsilon) = \{ \varphi(g) + c : \varphi(g) \in N_n(G), c \in \mathbb{R}, c < \mu(\varphi) \}.$$
  $\square$

上の(10)より  $\mathbb{C}U_{n+1}^N(G, \varepsilon)$  に属する表現は  $N_n(G)$  に属する関数によって完全にきまると考えてよい.

## §.6 可換群 $G$ 上の $P_1(G)$

この§では  $G$  は可換とする.  $G$  の unitary character 群を  $\hat{G}$ ,

$G$  上の連続な non-unitary character (i.e.  $\chi(g) \in \mathbb{C}(G)$  で,  $\chi(gk) = \chi(g)\chi(k)$  をみたし,  $\chi^* \neq \chi$  なるもの) の全体を  $G^*$  とする.

Naimark [5] によれば, 任意の  $U \in \mathcal{U}_n(G)$  に対して,  $\mathcal{H}_U^\perp$  はいつも  $n$  次元  $U$ -不変 non-positive 部分空間をもつ. この事実を  $n=1$  の場合に適用すると, 次の補題を得る (cf. [10]).

補題 7  $\mathcal{CU}_1(G)$  は次の様な表現  $U^1, U^2$  でつくられる:

$$U^1 = \chi_1 \otimes V^1, \quad (\chi_1 \in \hat{G}, V^1 \in \mathcal{CU}_1^N(G, \mathbb{E})),$$

$$U^2 = V^2 (+) W, \quad (V^2 \in \mathcal{CU}_0(G), W \in \mathcal{CU}_1(G, \mathbb{E})).$$

ただし  $W$  は  $\chi_2 \in G^*$  を用いて,  $W_g \zeta = \chi_2(g) \zeta$ ,  $W_g \eta = \chi_2^*(g) \eta$  と定義される.  $\{\zeta, \eta\}$  は  $\mathcal{H}_W^\perp (= 2$ 次元  $\Pi_1$  空間) のベースで  $\langle \zeta, \zeta \rangle = \langle \eta, \eta \rangle = 0$ ,  $\langle \zeta, \eta \rangle = 1$  をみたすもの.

更に  $U^1, U^2$  の cyclic vector は次で与えられる:

$$cv(U^1) = cv(V^1),$$

$$cv(U^2) = \{\alpha \zeta + \beta \eta + w : \alpha, \beta \in \mathbb{C}, \alpha \beta \neq 0, w \in cv(V^2)\}. \quad \square$$

この補題と注意 8(B) より,  $P_1(G)$  に属する関数は, unitary character と negative definite 関数, 又は non-unitary character と positive definite 関数を用いて表示できる.

定理 10  $\varphi(g) \in P_1(G) \iff \varphi(g)$  は次の (11) 又は (12) と表わされる:

$$(11) \quad \varphi(g) = \chi(g)(\psi(g) + c),$$

ここで  $\chi \in \hat{G}$ ,  $\psi(g) \in N_0(G)$ ,  $c \in \mathbb{R}$ ,  $c < \mu(\psi)$ .

$$(12) \quad \varphi(g) = \lambda(\chi(g) + \chi^*(g) + \mu(\chi(g) - \chi^*(g))) + p(g),$$



ここで  $\chi(g) \in G^*$ ,  $p(g) \in P_0(G)$ ,  $\lambda, \mu \in \mathbb{R}$  で  $\lambda^2 + \mu^2 \neq 0$  なるもの.  $\square$

注意 9 (A) 定理 6, 注意 6 及び定理 8 より, (II) にある  $\varphi(g)$  は次の三つの形で表示されるものに分類できる:

$$\varphi_1(g) = \chi(g)(p(g) - c_1),$$

$$\varphi_2(g) = \chi(g)(\sqrt{-1}r(g) + p(g) + c_2),$$

$$\varphi_3(g) = \chi(g)(\psi(g) + c_2),$$

ここで  $\chi(g) \in \hat{G}$ ,  $p(g) \in P_0(G, \mathbb{R})$ ,  $r(g) \in A(G)$ ,  $\psi(g) \in N_0(G)$  で  $\operatorname{Re} \psi(g)$  は非有界,  $c_1, c_2 \in \mathbb{R}$ ,  $c_1 > 0$  である.

(B)  $G$  が局所コンパクトでオ 2 可算公理をみたすとき,  $G$  上の negative definite 関数は "Levy-Khinchin formula" によって統一的に積分表示される (cf. [3], [1]).

(C) この § のはじめにのべた Naimark の結果は, 非可換であっても,  $G$  が連結可解群 (cf [6]) 又は連結局所コンパクト amenable 群 (cf. [7]) の場合にも成立する. 従って, これらの場合にも定理 10 及び上の (A) は有効である.  $\square$

#### References

- [1] Berg, C.: Potential theory on locally compact abelian groups, Springer, 1975.
- [2] Bognár, J.: Indefinite inner product spaces, Springer, 1974.
- [3] Guichardet, A.: Symmetric Hilbert spaces and related topics, Springer, Lecture Notes in Math., Vol. 261 (1972).

- [4] Iohvidov, I.S. et al.: Spectral theory of operators in spaces with an indefinite metric I, Trudy Moskov Math. Obšč., 5(1956), 367-432.
- [5] Naimark, M.A.: On commuting unitary operators in spaces with an indefinite metric, Acta Sci. Math., (Szeged), 24(1963), 177-189.
- [6] \_\_\_\_\_: Unitary representations of solvable groups in spaces with indefinite metric, Izv. Akad. Nauk SSSR ser. Math., 27(1963), 1181-1185.
- [7] Sakai, K.: On J-unitary representations of amenable groups, Sci. Rep. Kagoshima Univ., 26(1977), 33-41.
- [8] \_\_\_\_\_: On quasi-positive definite functions and unitary representations of groups in Pontrjagin spaces, J. Math. Kyoto Univ., 19(1979), 71-90.
- [9] \_\_\_\_\_: On quasi-negative definite functions and certain classes of cyclic unitary representations in  $\Pi_n$ -spaces, Sci. Rep. Kagoshima Univ., 28(1979), 9-50.
- [10] \_\_\_\_\_: On indecomposable unitary representations of locally compact abelian groups in  $\Pi_n$ -spaces, Ibid., 27(1978), 1-20.